

## 第一 葛木山岳神道について

我が国は神が造り玉いし国なれば、本来神佛を分かつ事自体大いなる誤りであります。生きとし生けるもの全て、生命の根源より出しことは、明々白々たる事実であります。生命の根源を印度においては天照太神、中国に於いては太古は盤古、その後は北斗聖人、我が国に於いては天照太神、さらに西夷に於いては佛、東夷に於いては神君となつていますが、我が国に於いては神となりて、人の人たる道を最初に八衢（やちまた）の例えで説かれてます。爾来神なる言葉は生命の根源をさす言葉であり、あくまでも隠り身の存在である故に「カクリミ」より、「カミ」なる言葉が生まれ、神の子はいかに生きるべきかを教諭され玉うたのであります。大王家においても、國造家に伝わる神の道を尊崇し、日靈女に命じ、普通の神を崇めさせていたが、倭比賣命の御代になりて伊勢の杜に斉王の花を、磯部の一族海人の神人（あまつびと）である度會家（わたらいけ）の手を借りて開かれたのが、伊勢古流とも称すべき正統古神道の誕生となり、倭比賣命が五十鈴なる神事に元づき、伊勢における神事をその後書きとどめたのが、「鈴の神事控え」となり、渡會家傳神道の中に命脈を保ち得たのであります。

縄文の半ばより、弥生にかけての古い形の神道は、一つには國造家の部族の平和と発展、今一つには部族民の健康と子孫繁栄を願い、主として部族の長ゆかりの処女より選ばれて、日靈女となり神事に携わるが、祭式は神人一致となる託宣方式であり、最初に國造家の秘事を後世に伝えるために、天照太神の神事秘事にもとづく八雲琴による、神にもうしのへるといふ祝詞方式にて、「あつたものを、その後纏めたのが『出雲國造神賀詞（いづものくにつくり・かんがことば）』であります。和を尊ぶ出雲國造家には、神を中心として、相争う事を好まぬ故に、古くは一族の平和と、存続を願い大王家の軋轢を避け、入水なされし國常立命、その後に斑鳩における聖徳太子の隠された悲劇などがありますが、國造家には常に異民族に対しても優しく、他の部族に対しても争う事がない事は、『古事記』に須佐之男命の朝鮮における植林事業が明記されている事でわかりますが、國造家の血を引く一族が大倭（やまと）なる地に於いて、葛木王朝を築きあげても、異民族の他国民を優しく迎えるだけでなく、異なる宗教も許していますが、これが「兩部神道」における根本理念の一つともなり、「我が国における神の教えも、異国における佛の教えも、同じ神へ通ずる眞の教え」となり、ここより「二つの異なる教え」が「兩部」なる言葉になったのであります。

葛木においては國造家の血を引く役の公も、山岳法華行者の修行の場を二上山の地近くに開かせ、彼らの優れた法華の秘法を学んだ事が、叔父君願行大徳



により自然宗の門を叩くことになり、さらには優れた異国の僧を紹介され、そのもとで修行したのが、雑密修行となり、さらには比叆の地にて孔雀秘法を伝授されていますが、中臣神道の神祇灌頂も、中臣意美臣（なかとみおみまる）より受け、家伝の葛木神道を主とした神道部と、異国の優れた秘法を従とした佛家部と、「二つの優れた教え」を融合させたのが、「兩部」であり、後に聖寶尊師が真言密教にもとずき体系化したのが「柱源神法」であり、一時絶えし葛木神道を葛木山人は「櫻宮神道」として西大寺菩薩神道の中に遺されたのであります。

連綿と一子相伝されし秘事の一端を明かすなれば、真言宗開祖弘法大師も、國造家縁の山の一族なれば、早くより一族の定めに従い山岳法華修行に励み、比叆の地にて雑密による求聞持秘法の伝授を受け、葛木は二上近くの古山寺にて法華山岳修行をし、櫻宮、高天寺にて葛木神道を学び、託宣にて朝熊山において求聞持秘法を修し、兩童子なる護法行者を授かりし大師は、童子の夢告により伊勢路に入り、伊勢神道を学ばれたのであります。かくして大師は正式に真言密教を継承したる後、高野山を一大拠点とするに、山の一族の力を得るだけでなく、日本古来の天津神は伊勢の地、地津神は土地の地守神を招き、神々の加護を願われたのであります。「神佛と教えは異なれど、その説く所は同じなり」として、ここより「神佛なる二つの尊き教え」から、「兩部」なる名称を付し、夷国にも神の道あれば、我が国にも神の道あり。神の道は普遍なれば、そのまま「神道」なる言葉を用い、「兩部神道」の名前のもとに、神佛の

根源は本来同一として教えを説かれたとされていますが、この説にもとずき源慶安が正徳六年（一七一六）に『兩部神道立派口決鈔』の中で、「神道佛道の兩部なり」と言い切っておられます。

弘法大師の神に対する敬慕の念は篤く、その御心はやがて山岳行者を束ねる真言宗理性院ゆかりの僧侶の手によって生かされたのが、『伊勢太神宮瑞柏（みずかしわ）鎮守仙宮院秘文（ひもん）』であり、弘法大師の名のもとに『天地麗氣記』が書かれています。今日までにその詳らかなる口伝書は公開されていませんので、いずれも内容不鮮明のままに闇の彼方に眠ったままであります。このまま兩部神道は潰え去るかと思いが、西大寺菩薩流の祖叡尊僧正は、命により伊勢に参拝下向のおり、伊勢渡會家において『鈴之神事秘事』の伝授を受け、伊勢渡會家の社主と共に天長十年（八三三）八月十三日大日沙門空海名の『大日尊神中臣祓 天津祝詞 太祝詞 文傳（ふみつたえ）』を骨子とした『御祓本』を書き上げたときれしものが、明治まで伊勢外宮において渡會神主が用いています。内容としては一見して明らかなる兩部形式であります。さらに中臣祓、諸祓、皇天呪などとなっています。

数少ないとは言え兩部神道の秘書はありますが、今日までに一冊として完全な翻訳書はなされていません。近年においても八田幸雄尊師が三輪流神道の研究の一環として、『三輪大明神縁起』を手掛けられています。菩薩流神道の流れによる神祇灌頂、及び神事口伝の伝授を受けていられないために、鮮明な内容の解釈がなされていません。難解とされてきた兩部神事秘傳書は、実は葛



本神道の秘伝書『大和葛城寶山記』の口伝書が底本であり、これを詳らかにすれば、『三輪大明神縁起』も容易く解釈が出来ますし、さらには『天地麗氣記』も、役行者仮託による『二所大神宮麗氣記』が冒頭にあり、明らかに葛木神道秘傳書にもとずいたものであることが明々白々であります。

かように兩部神道の秘事は、すべて頑なまでに一子相伝により、神祇秘事として後世に遺してはいますが、その際祖師達が苦慮したのは、隠り身の神の秘事を詳らかにすれば、必ず愚かなる者が之を悪用し、世に邪悪なる宗教を興し、神の存在を軽んじるは必死と見ての処置でありました。罹る次第なれば大師直伝の神事に関する秘法は、高野山においても封じられて「唯一大師御流神道」は、水原堯榮猊下と共に高野山清浄心院より消滅し、「西大寺菩薩流神道」、「雲傳流神道」は金田元成尊師と共に京師白毫寺にて途絶え、「伊勢古流鈴之神事」、「葛木神道」は、法螺貝山人と共に阿波国剣山法螺貝滝の中に封じられたのでありますが、何故か祖師達は最後の際に、不甲斐ない愚鈍なこの身を招き法流伝授を行い、一縷の望みを後世に託されたのであります。無論この歳に至るまで何もしない事はありません。聖の道に生きながらも何とかせねば焦りし事も度々ありましたが、いつも結果は無様なありさまでした。誰でも最初は協力的であり、かつ紳士的ですが、こと金銭が大きく絡むと、醜い人間の本性を晒けだし、悲しい思いに胸が塞がれます。一出版社の社長は最初は猷身的でしたが、最初の本が良く売れると一社員を専属的におき、さらに飛躍すると講伝会を開き、売れ残りの在庫本を多数捌く事が出来ると、その欲望はさらに

広がり、甘い汁を求める行者の群れをも懐柔し、あまつさえ神聖な高野山の大師信仰者の群れを汚すにいたり袂を別つことになりましたが、私自身その罪の代償は大きく、長年住み慣れし土地は追われ、それまでに築いてきたものもすべて無くし、傷心の身に二月の寒風は本当に応えました。満足なものも纏わず裸一つで讃岐の地から、今の娘に招かれ浪速の地に出て参り、最初は娘の望む日本伝承文化の一端である、伊勢古流神事を如何にして残すべきか、皆目検討も付かず、一年間は焦りにも似た試行錯誤の繰り返しを行ってききましたが、冒頭のような次第にて、我が師が何故兩部神道を徹底的に学ばせたか、ようやくその意とする所がわかりかけたのであります。

暇にまかせて数多くの秘伝書の整理中、高野山に於いて、我が師法螺貝山人が、高野山より官憲の手に追われた際、急ぎ退去せしおり残されたであろう、貴重な書籍数点が現出したのであります。

一つは京師醍醐理性院より、社主として赴任した鶴岡八幡宮名のある秘文書と、今一つは慈雲尊者が受けられし三輪神道の聞き書き、さらには慈雲尊者の初期の葛木神道書と、伊勢神道書であります。

この二つの秘伝書により、手元の葛木神道資料の正統性が裏付けられ、さらに当時の天台寺門宗務総長中村健壽尊師より、天台方式による正統柱源神法伝授されたおりの葛木行場復活資料『葛木秘卷』により、一見すればバラバラのような兩部神道の流れも、國造家より葛木王朝へと流れ、役行者の手を得て葛木神道の大成となりしことと、さらに後年葛木神道は、慈雲尊者こと葛木山人



によつて雲傳流神道の中に生かされた事が明瞭となるだけでなく、秘められた葛木神道の全容を知ることが出来たのであります。弘法大師も、初期葛木王朝の葛木城神道を学ばれたのが縁となり、伊勢古流神道を学ばれたのであります。その縁の伊勢において、西大寺叡尊僧正が鈴之神事秘傳を渡會家より伝授を受け、天照太神の託宣により、西大寺において菩薩流神道を開かれ、槇向は三輪において真言密教の儀軌に添わない、古典的神道資料にもとづく伊勢古流神道を、大御輪神道として興され、覺盛に依託されたのであります。その後中絶してはいますが、後年慈雲尊者が、護法行者天如師より、正統三輪神道として西大寺にて学ばれ、雲傳流神道の中に大成されたのであります。

さらに葛木神道の流れをみると、聖寶尊者より、觀賢・淳祐より三寶院流勝覺を経て賢覺・賢信・乗印・勝因・覺舜の理性院流へと伝えられ、さらに元鶴岡八幡宮社主法螺貝山人へと、「葛木神道」、「伊勢古流鈴之神事」は伝授されておられ、今一つ葛木神道は聖寶尊者より、淳祐・成尊・明算の中院流へも伝えられている事は、清淨心院水原堯榮師の、「唯一大師御流神道」を紐解けばわかる事であり、さらに驚くべき事実には、龍樹菩薩、神變大菩薩、弘法大師、眞雅・源仁・聖寶と流れ、三寶院流より、實深方隆勝、有雅、寛順、性善を経て高野山真別所密門宥範へと法脈は流れています。宥範は、葛木一言主寺宣範の元で得度し、そのおりに葛木の秘事を伝授されたと伝えられています。その中に「傳法許可火檀灌頂印信紹書」がありますが、この秘事は現在の柴燈（採燈）護摩の原形であります。元は一山の僧侶が庭儀方式により行われ、

これに湯立神事、松炭百貫を用いての火床三昧耶法が加えられています。勿論葛木縁の僧正の庇護を我が師が求め、真別所に滞在の中に、更なる秘傳葛木神道を託したものと推察されます。

聖寶尊者の流れである勝覺の三寶院流は、定海・元海より、松橋流一海より、静慶・叡尊の西大寺菩薩流へと至り、「伊勢古流神道」は「菩薩流神道」に生まれ変わり、さらに覺盛・幸圓の手を得て「大御輪神道」となり、菩薩流神道は高喜・慧猛・信光・普攝・貞紀・飲光・智満・大圓・元成に至る「雲傳流神道」と、多くの祖師達が命掛けて法の純粹さを尊守してこられていますので、安易に後世に遺すべきものでないものですが、邪法多き今日なればこそ、法螺貝山人、堯榮尊者、元成尊者が、何故か私ごとときに、それぞれの秘法の元になるものを遺され、遺偈として「この世に縁尽きしまでに、神佛の加護無く、後世に託す事叶わぬ時は、定めに従い資料の全てを焼却し、一法も遺すことなかれ」と。

常々我が娘真鈴（葛木神名・高野僧名は照弘）は、護法のために幾多の屍を曠野に晒せし尊き方々の存念と聞き及ぶ。「此の世に残す遺偈は、龍燈の燈心よ。幾多の風雪あらんと消える事勿れ」を。この言葉を父が護り、次の世代のために努力され、日本古来の正統神道を後世に託し、人の生きるべき神の正しき教えと、神の道を伝えて下さる事が願いと申していますが、師の言葉と言ひ、娘の言葉と言ひ、今は我が心に深くしみいり、護法一念に生きなると誓えば、娘は世事の一切を引き受け、我が糊口をまで女の身で引き受けて下



さるお陰で、心置きなく夜は託宣、昼は秘法の整理に務めました。が、今一つ本流出雲國造家の神事と、葛木の神事と流れが掴めないで悩み、娘ともども、國造家守護神御熊野坐大神の膝元に参り、一夜熊野灘に向かい託宣をとらんと、波間に向かい座を組んでいたおり、打ち寄せる荒波の荒々しき音がいつしか消え、やがてえも云われぬ妙なる音に変わり、やがて波の彼方より、

古来より我が国は神の國　人は厚き信心の元に安らかに暮らし  
姿無き隠り身の神なれど　身近かの場所に必ずいると信じられ  
朝な夕なに生かさされ　この身を感謝して祈りを捧げしと聞く  
人里離れた村に住む人は　外がほのかに白み始めると日天さま  
日が沈み始めると急ぎ帰り　夕餉の支度をすませると月天さま  
善きにつけ悪しきにつけ　ささやかな願いまで手を合わせしと  
かつてはどんな小さな村でも　村の中には生い茂れる杜があり  
そこには神の住家もあれば　神と人々との語り合う庭なりしと  
さらにこの祈りの場は　かつて人々が野山を飛び回っていた頃  
一族の中心となる人が死ぬと　村の中心に村人は集いて埋葬し  
早く天に御魂が帰らんことを願ひ　高き木柱を立てし所なりと  
時を経た魂は五年十年とすぎゆけば　荒々しき御魂なる荒魂も  
いつしか年とともに浄化されて和かなる　和魂と生まれ変わり  
一族を守るために神の身となり　再び木柱に御魂戻りし場所と

かかる御魂やすまる場所杜なるは　産土の神となりたまうなり  
天地自然の脅威に対する神として　人々が作りし最初の神なり  
山に入る朝に一日の無事を祈り　仕事を終わりに山より下りて  
夕べの一刻　夕餉をかこみて　一日の無事を神々に感謝すれば  
女たちは早朝朝餉の水を汲みて　天の神々、地の神々に捧げて  
先祖の御魂安からんことを祈り　家族の一日の無事なるを願ひ  
夕べにおいて家族がうちそろひ　無事なるを家を守りし神々に  
手を合わせ心より感謝し　日々を安穩に暮らせるよう願ひしと  
かつての素朴な信仰の姿は　廃佛毀釈なる風が吹き荒れてより  
次第に影をひそめ　近時においては神はかまわれぬ存在となり  
人はかつての優しき心根を捨て　ただ阿修羅のすむ世と変わり  
己が手で　己の住む世界を打ち壊し　深き緑の木々は無くなり  
山は荒れ果てて　谷川は悪臭つけば　心優しき森の住人たちは  
いづくか遠くへと去ってしまひ　寒々として尋ねるよしもなし  
命の水は濁りははて　毒と化したるものが地上に満ちあふれて  
心身ともに疲れはてて　病む人巷に溢れ　救いを求める人多し  
されどいまだ人々は　夢魔の中より目覚めようとするとなし  
むしろ怪しげな宗教巷が満ち満ちて　さらに人の心をむしばみ  
佛の御世　神の御世　いずれにおいても　ともに言う言葉なし  
さればこそ　真実の正しき神の教え　語りかける必要ありなん



いまだ明けやらぬ暁暗において、しばし静寂の後。さらに天なる声は

今をさる事何十万年か遙か彼方 水の珠地球が生まれしおりは  
銀河宇宙といわれる大空間は 何もない無の世界なりしと聞く  
あくまでも澄み渡れる虚空において 天の気が生じる因ありて  
銀河宇宙の要めにおいて 等しく万物の生命の根源ともなれる  
陰陽あい交わったる 球状の物体が大気の中に生まれいでたり  
やがて沸つ沸つと湧き出でたる 生命の気なるが動き始めるや  
もはや止めること叶わぬ勢いとなり 蒸気のように透明度増し  
熱気を激しく帯びたガス状の気となり 陽の気と生まれ変わり  
ガス状の気なるが球内に立ち込めしが 球状の上部に達すると  
しだいに熱気が離れていき やがて冷めると しずくとなりて  
下方に向かえば 巴の模様を描きながら 落ちはじめしといふ  
ますます陽の気が盛んとなれば おのずからしずくも増えしが  
天の不純物を中核としたしずくは 濁りたる陰の気へと変わり  
ここに天地の間において 陰陽なる二気が生じたるゆえんなり  
かくして陽の気は益々熱を増し 不生不滅のもといともなれば  
廣大無辺の銀河宇宙空間における 絶対的存在となりたまふと  
かくして燃え盛る天の火は 一切の不浄なるものを焼き尽くす

浄化する所の力をも 兼ねそなえた力ありと説き玉う由縁なり  
その反面 陰の気はさらに冷たさを増して 無限の生を表すと  
常に陽の働きにより 陰の気が増せば 陽の熱気は中和となり  
陽の気が弱まれば陰の気増大し 万物を冷却させる事甚だしく  
陰陽の増減による影響力は やがて潮の満干作用を生みたる  
湧き出ずる大地の水は 焼き尽くされた荒野に新たなる生命を  
生みだすだけでなく 豊かなる豊饒を約束なされたまふなれば  
陽の気なるは あらたなる生命の息吹を司る所のいう神の存在  
陰の気なるは 生まれ出でし生命の育成を司る神の存在なると  
鈴之神事においては 大切なるは天の真鈴なりとも説きたまひ  
真鈴の形こそ 天より落ちたる最初のしずくの形を表すとされ  
さらに廣大無辺な大宇宙を 一円にて表すことも出来るなりと  
白く明るく澄み渡る気は 天に駆け昇りて偉大なる力となれば  
聖なる左側に描く事により 生命の根源を表すなりと説き玉う  
どんよりと濁り重く濁りし気は 大地深く沈みて陰の力となり  
聖なる反対の位置に描き 万物陰陽成り立つ姿なりと説き玉う  
さらに陽の気が立ち昇れば やがて沈みて陰の気と廻りゆくを  
鈴之神事控えに於いては 太極の図にて書きあらしたまうなり  
さらに説くなり 廣大無辺なる大宇宙においては 太気を生じ  
やがて太気が激しく陰陽二つとなり 互いに活動する事により



太氣の一点が固まり 太極となりて 生命の根源が生じたりと  
生命の根源は 真言密教の教えにおいては 阿字玄々宮と説き  
鈴之神事秘伝なる教えに於いては 太一之宮とも説きたまえば  
さらに阿字玄々宮なるは 変じて大日如來となりたまうなりと  
太一宮 変じて天照太神となりたまうとも 伊勢の教えにあり  
重々秘伝によれば ここより天照太神の太なる字生まれたりと  
故に伊勢の太一なる文字は 天照太神と書き改めたるものなり  
一度生命の根源燃えいだせば 熱き炎の一点となり立ちのぼり  
その気ますます盛んとなり 生命の根源となる熱源の内部には  
陰之氣 陽之氣 ともに激しく動きて 渦を巻く始めるとい  
巴なる文字は 即ち この渦が激しく動くさまを表す文字なり  
卍巴なる言葉は さらなる氣の動きをばあらわせるものなりや  
鈴之神事極秘伝に かかる陰陽の秘事ありしがさらに説き玉う  
倭姫直傳なる鶴の神事作法に於いて 秘められた秘文ありしが  
秘文中に鶴なるは 是るぼると高天原より伊雜宮に飛翔せしと  
その身は一点のしみなく白色にして汚れなく 天空に輝きしは  
まさに天照太神の化身なれば 陽之氣をあらわしたまうなりと  
さらに伊勢の深海深き彼方に この世の邪氣を全て飲みつくし  
黒く重くよどみたる氣を 己が体内に秘めたる大亀が住みしと  
古來陰之氣を表すとされ 鶴龜ともにその齡知らずとありなん

故に伊勢之神事においては 不変の長寿を表すに用いるなりと  
亦た巨大なる天の氣 凝り固まりて最初の氣の固まりとなるを  
鈴之神事に於いて 丸いふぐり状の鈴なる天之真鈴で説き玉う  
真鈴なる 天の氣ひとたび動きて 一滴のしづく天下るなれば  
まさに巴なる文字のさまと似かよい 天の氣を表すものであり  
天照太神の御標なる 首に掛けさせ玉う 天の勾玉でもあると  
さらに汚れ無き鶴の首を そのまま象れるものと説き玉うなり  
日もささぬ海底の大亀が流せし涙は 地の玉なる真珠なりしと  
天地の命脈をもってあらわすに 天の玉 地の玉が一つとなり  
天地に道に通ずる道が 一度変じて管玉となりて氣脈を表すと  
かくして天地が出来 人間も生まれて 氣脈が通うことにより  
父なるが陽の氣を放てば 陰なる母の氣なるが それを受けて  
天の真鈴状となる生命の根源を 初めて胎内に宿す基いとなり  
天の氣は 鈴の頂き天門より入りて 地門へと下りて氣脈通じ  
月日とともに人の思考能力の基いである 中枢神経と変ずれば  
人の氣は臍の緒をもちて 母の命脈と繋がり 上りて口と通じ  
肉体を形成するに於いて必要な養分をつくる 消化器官となる  
両者に於いての要は 女は蓮華部 男は丹田部なりと説き玉う  
天なる管玉の働きをする氣の渦が生ずれば 人は成り立つなり  
日本古來の神道において かくの如き生命の根源を詳かに説き



天地自然の理を明らかにし神の道をば 倭比賣命は説き玉えば  
弘法大師は 真言密教の教理に基ずき 伊勢神道を説きたまう  
さらに大日如來なる御佛の徳を 天照太神にあてはめられ玉い  
その尊き御姿をば 五輪宝塔をば 頭に頂きたる姿に描かれて  
天の瓊杵を御手に持ち玉える 尊き雨宝童子の尊像となし玉う  
さらに太神の厚き御恩徳を 生身の聖如意輪觀世音菩薩として  
真名井御前の御尊体を通して 一切諸神の本地と説き玉うなり  
さらに觀尊僧正は 両者のすぐれたる教えを 一つにし玉いて  
生きとし生けるものの住む世界をば 曼陀羅にて説きあかせば  
生命の根源なるを大日如來と定め その働きを觀世音菩薩とし  
真言密教の教えをもって これを分かり易く教え玉うと聞きし  
この理りを知らずしては 兩部神道なる教えは闇の彼方なり  
兩部の秘事知らずして 神事を理解出來ぬは まさに至言なり  
觀尊の西大寺菩薩流神道には 真言密教に基ずく護身神法あり  
さらには神道加行も 十八神道加行も 太神宮法 すべてあり  
神道護摩秘作法を濟ませて後に 灌頂加行へと いたるなれば  
さらに神祇灌頂 許可灌頂を受けてより 十種神宝灌頂を受け  
師より授かるは 深紅の勾玉と 深き緑の管玉 赤き小珠なり  
秘すべきなり。まさに秘すべきなり。天地の三種の玉なるをば  
これを紫色なる袱紗に包まれしを 三種の神器と いうなりを

やがて夜は白々と明け、正面に向かえば白浜より、熊野街道を伝いて、大和  
の山を拜すれば、いつしか遠き大和川の流れにいたり、さらには葛木連山が、  
己が胸の中に映ずれば、さらに神事の秘事が、天より説き明かされたのであり  
ます。

聞くがよい 何を隠そうや 聖なる葛木の連山こそ  
古事記聞書傳に書かれている 神話創設の地なるぞ  
葛木王朝秘卷に説かれしと言う 神代の創設の地は  
遠き古への時代において 日本海は大いなる湖にて  
未だ地の神々におかれては 住まわぬところなりし  
高天原より望めば 此の地は富士火山地帯を軸とし  
蝦夷地なる大地は 大きく北に向けて頭の形を描き  
能登半島と 伊豆半島に通ずる 大地は第一の羽根  
島根半島と 紀伊半島に通ずる 大地は第二の羽根  
九州における薩摩の諸島は まさに蜻蛉の尾となり  
ここより 秋津嶋なる蜻蛉の国が生まれ玉うなりと  
蜻蛉の命なる要は 葛木にありなんと秘事にあり  
ここより 慈雲尊者は 葛木神道を紐解き始め玉う  
大倭豊秋津嶋は 天つ御虚空なる 豊秋津根なりと



葛木連山の北麓の地より 大和川に沿いて下りし人  
始めて見る 大いなる河内湖なるに出会ひ驚きしと  
さらに湖に注ぐ とうとうと流れ川の水量にも驚き  
湖一帯の生い茂れる たくましき葦が生い茂たるを  
感動深く眺め渡し 出雲なる國造家ゆかりの杣人は  
さらに西側に 広々と広がりし低湿地帯を眺めるや  
まさに 我が国の成り立ち ここにありと感じたり  
激しく流る西側とは異なる 東側の三角州に於いて  
多くは水の流れに身を任せし 浮き島の集い集いて  
やがては 西と同じ湿地帯となるであろうさまこそ  
まさに 国の成りたつを説くに相応しい地と思えり  
大王家の天御中主命を祖とする 神話に耳を傾けず  
國造家に相応しき神話を求めての旅路の果てに得た  
新たなる知識に感動し ここに説きおこせし玉うが  
葛木神道の基幹ともなりし 天地創造の神々なりや  
天地の始めはかくの如し 浮き島の如き大地なれど  
新たなる生命葦の如き 強靱なる生命を与えら玉う  
最初の神として迎え 國之常立之神と名づけたるは  
この大地が いく久しくなりませる事を秘めたりと  
この神の命を受けて 浪速江の葦原の郷においては

雄々しく たくましき 葦を芽吹かせる玉うという  
大地造成の神として 國之狭土之神を出でさせ玉う  
新しき大地に 葦以外の生きとし生ける者の命の糧  
豊かなる作物を育み 守らせ玉えとの願いをこめて  
豊斟之神を いでさせ玉うも 漂う多くの浮き島は  
砂と泥土多くして 未だ一つに治まらぬさまなるを  
まさに春の野に遊ぶ乙女心として 沙土煮之神とし  
浮き島を一つに落ち着かせるため 一人の力でなく  
二人して泥土を固め 新たなる土地を守護し玉えと  
泥土煮之神なる 二柱の神をば出でさせたまうなり  
新しき大地が再び水に流される事なく 必要に応じ  
川面に向かい杭を打ちつけ 土留めの工事を行いて  
土地を守るだけでなく 新しき作物を育てるために  
寝泊まりする建物を新たに拵えたまう神の御名をば  
大戸之道之神と定めたるも 作物の種蒔き 育苗と  
収穫 保存となれば手間と 手数がかかるをもって  
大苦辺之神と助け合う 二柱の神をば出でさせ玉う  
かかる神々の働きありて 神の子らの誕生の支度は  
すべて整えたりとして 最後の仕上げにかからんと  
おおしくも たくましき男神は 大地に降り立ちて



面立ちの整ひし麗しき女よ いざ我が腕へ来たりて  
貴女の全てを与え玉えにより 面足之神と名づけば  
何と恐れ多い言葉 宜しくば 我が胸乳を捧げんと  
敬ひて申せしにより じらい惶根之神と名づけ玉う  
かくして 神の子らを招く為に 神代七代における  
最後の神として 互いにいざない いざないよりて  
うつしみの神の子の生命を 与え玉う尊き方なれば  
伊奘諾之神 伊奘冉之神と称えたまつる次第なり  
かく秘事なるは口にも 書き残すべきものでなしと  
葛木秘卷なる秘傳書も 世にとどまる事なしと聞く

かくの如き神事に関する秘事をまとめしものが秘伝書であります。巷において一般の人が間違つて秘伝書を解釈するのはまだしも、名のある学者においても誤認されているのが現状であります。「秘伝書」とは一般的解釈をいたしますと、「人の目に触れてはならない秘密の書籍」となりますが、古来印度に於いては佛典を筆録することは、その神聖さを損なうものとして、師が機根を定めて特に選り抜いた一人の弟子に、口で伝えたものを弟子が後世誤つて残してはならないとして、一種の手引き書を作製し、後日疑問点などを調べたり、師に尋ねて、朱筆でもって書き加え、より完全なものとしたものが「秘伝書」

の原形でありますから、古来「秘伝書」は師の茶毘の通りに焼くのが本義とされて来ましたが、後世においては師の最後に間に合わず、そのまま放置された「秘伝書」を、あわてて師の亡骸の安置場所に納めた例もあります。その有名なものに「石室の秘傳」と言われる「赤白二◆(シ帝)論」があります。何れにしても後世真実の教えが誤つて伝わらないようにする目的から、行われた「秘伝書」の考えが、神道においても、天台宗においても「口伝法門」となっていますが、真言密教においては、弘法大師の流れが二つに分かれ、その内の「廣澤流」においては「経軌を重んじる」に対し、「小野流」では「口伝に従う古伝方式」をとっていますが、高野山においては通称「十二口傳」なる古い口伝があります。これは「大日経奥疎講傳」の時の十二通りの口伝ですが、一通りの修行をすませたものの中から、選りぬかれた弟子が師の面前で口授されたのが最初であり、この後は全ての口伝に対し厳しい掟がしかれたのであります。此処で言う口伝は「原則的には諸神諸佛諸菩薩に対しての秘密の作法に対して必要な、印信、作法心得を、師が口外することを堅く禁止、面授口決を行った事」を指しています。

もちろん本覚思想にもとづく天台宗の口伝法門、真言密教にもとづく秘儀の伝授において、鎌倉時代以降秘儀の要点のみを墨書し、師の花押を書き加え授けていますが、此の場合の和紙が「切紙」であり、その際秘作法や、秘印信を師より「直接傳授」をうけ、師の許をえて切紙に書き入れる際、口頭の文字を略し「口」とし、伝授の文字を略し「イ」とし、合わせ「ロイ」と書いたの



が、「切紙口傳」であります。この口伝にもさまざまな種類があり、一例を上げると宗門における「山内口傳」、その寺に代々伝えられている「寺傳」、師から授かる「師傳」などがあり、内容によっては通常の「口傳」に対し、一子相伝に値する秘事部門を説き明かした「重々口傳」があります。

奈良、平安の時代から、人は何故か家門を重んじ、家系を尊重するあまり、自分の家系に重みをつける眉唾物の家系図を作製していますが、伝授書も同様に鎌倉時代以降は、巷間における似非坊主、神主、行者、卜占師が、雨後の筍の如く輩出し、彼らはこぞって「偽傳書」を珍重し、数多く作製していますが、これをよしとされない方が、口伝を重んじ、一子相伝の後、内容の無い形だけの秘伝書を作製し、弟子に手渡している「白紙秘傳書」があります。

江戸時代に入り一部の国学者によって「國家神道」が流行したために、神道に関する偽傳書が数多く出回りましたが、それに対して「一子相傳による最奥秘傳あり」という、通称「留置秘傳」なるものがあり、さらに、印可許可状を持つものだけに、直接授ける秘伝が「直傳」であります。この秘伝の場合は、後世において正統な秘法が、世を乱すもといとならざる事と、さらに秘法の尊厳を保つために、あえて秘伝書、許可状の類いは筆記されていせん。長文となり、前文暗記不可能な場合は、差し障りのない件、暗記させた事を思いださせるような文、これらをうまくまとめた秘伝書はありますが、これだけを読んでも、書かれている意味がまったくわかりません。

特に、倭比賣命、度會、空海、叡尊、さらに多くの祖師が、純粹な正統神道

秘伝を順守し、関係ない余人の目には触れる事も、その存在さえも、定かにさせていません。あくまでも筆記を拒み、口頭伝授のみを行って来たものに、「葛木神道秘卷」があります。内容としては、かつての葛木法華道場の詳細な解説と、そこにおける修行内容、さらには最大の眼目である葛木神道のすべてが述べられています。その中で、世の多くの修験道関係者が求めて止まない秘傳も多く含まれています。戦後荒れ果てた葛木二十八宿行場を復活させる為に、天台寺門宗の中村健壽尊師が、さらに柱源神法の口伝書を、共に紐解かれた上で、行場を古式にもとずき整備されたと聞きおよんでいます。

愚徒の場合は、葛木神道について、法螺貝山人より伝授を受くる際、醍醐理性院流にもとずき、口頭伝授で『葛木秘卷』と、さらに付随した秘伝も伝授されていますが、『葛木秘卷』は、もちろん葛木の全てを網羅してはいますが、これによると驚くべき事が書かれています。一つは役行者が修験者ではなく、山岳法華行者であり、國造家ゆかりの賀茂の社主である事と、今一つは葛木連山は、純然たる修験道の山ではなく、日本最古の山岳法華道場であるという事です。

古来葛木行場を知るためには、葛木ゆかりの行者が鎌倉時代までに纏められたと伝えられている『諸山縁起（大峯縁起、葛城縁起、一代峯縁起）』があります。現在は日本思想大系（一九七五）版（岩波書店）にもありますが、その第二十に『寺社縁起』があり、内容は大峯七五靡（びき）に相当する九五宿を、紀州加太の友ヶ島より始まり、金剛山の峰々の行場を巡り、大和川の亀ヶ瀬で



終わりますが、途中二上山付近で順番のない行場があり、中村尊師は「一切の迷夢を覚まさんがため、百八煩惱悉く打ち砕くため、百八行場に意図的にしたもの」なりと教示されています。次に寛永十九年の奥書のある『葛城峰中記』があります。現在は山岳宗教史研究叢書（昭和五十九年版）『修験道史料集（Ⅱ）』（名著出版）にあります。奥書を見ますと元禄十三（一七〇〇）年京都千勝院亮栄の著作と書かれて、『諸山縁起』と同じく百八行場に基ずいて書かれています。同の中に『葛城先達峯中勤式廻行記』があります。宝永六年（一七〇九）快意と書かれて、村毎に詳しい行場は書かれていますが順序は書かれていません。さらに嘉永三年（一八五〇）智航が和泉国犬鳴山七寶瀧寺智航上人の苦行記録を、滝の本坊においてあったのを大阪堺筋和泉屋が出版した『葛嶺雜記』が書かれています。これは昭和五十四年に摂河泉地域史研究会より再版されていますが、今日では手に入りにくいと思います。幸い七寶瀧寺より、平成元年に貴重な文献葛城雜記を元にした『葛城回峰録』を出版されています。紀伊河内大和における行程二十八里五十四箇所の行所が詳しく説明され、行場の写真も多く記載されています。さらに最後にごく新しいのは醍醐山青年連合会阪奈支部より『行者さんといっしょ』が出版され、現在の葛木行場が図解されており、独りで行場巡りをするには最良の書かと思われまます。これらの書物を読破しますと、何れもが修験道の観点より修験行場として書かれています。葛城山は本来修験道行場ではありません。これは葛城山系に数多く埋納されている経塚と、その埋納位置、その当時の史実を照合すれば、

自ずから答えは返ってきます。即ち二上山、金剛山、梅尾山、嶺の龍王の主要な場所に法華經二十八品、これを供養し奉る如法經二十九卷、般若經八卷が埋納され、これらを守護するために、八方位の位置に「葛木八大童子」が設けられていることは、此の山が古代山岳宗教の発祥である法華行者の聖山である証しでもあります。葛城山は尾根伝いに歩む所も多く、紀州河内大和の国境の屋根筋が多く、晴れば遠くを遠望することも可能なれど、霧が柚道を這うように流れ、ば、まさにこの世とは切り離された感じがし、金剛の奥深く分け入れれば、苔むす大木が道を防ぎ、日中と云えども薄暗き所もあり、急峻な谷間より吹き上がる白い霧は、両側の岩肌を隠し、獣道を消し去り、この世のさまと打って変わり、物音一つしない幽玄の彼方へと、誘われる事がしばしばあり、いつしか己が信じる神佛と一体化する境地となること、やがて修験の道と変えたのではないのでしょうか。佛教伝来は宣化三年（五三八）に百濟より伝来したと『上宮聖徳法王帝説』、『元興寺伽藍縁起併流記資財帳』に書かれた資料より定説となっていますが、『日本書紀』では欽明天皇十三年（五五二）となっています。しかし法華經持経者聖徳太子（五七四～六二二）はそれより早くから法華經を研究なされたから、有名な『法華義疏』を書く事が出来たのではないのでしょうか。その当時のようすをみますと、法華經は三世紀頃までに西印度で編修された大乘經典であり、中国においては鳩摩羅什門下の竺道生（三五五～四三四）が、妙法蓮華經疏を書いていきますし、その当時の慧遠（三三四～四一六）の弟子慧觀（四～五世紀の人）が『法華宗要序』を書いていきますから、すでにそ



の頃には『法華經』が広く知れ渡っていたということ。さすれば正式に佛  
教伝来するまでの間に日本各地に中国・朝鮮より数多くの渡来民が移住してい  
ますから、彼らが日々尊崇していた法華經があっても不思議ではありません。  
山陰に漂流したものは大山の山の民、北陸に漂流したものは白山にいたる山の  
民、瀬戸内、南海に漂流したものの多くは葛木の山の民と交わって暮らしてい  
るうち、彼らが崇める佛は佛としてではなく、山の民の尊崇する神と変わらぬ  
異国の神として、自然に同化し祀られ、やがては異国の人も我が国に帰化して  
行くように、異国の神も我が国の神に帰化したのでありましょう。

現代人の最大の欠点は何でも己の知識に頼りすべてを判断することと、無心・  
無欲・無布施の三無の精神が失われていることとあります。常に私の心なく、  
天地自然の恵みに感謝し、生きとし生けるものすべてと同化するという三無の  
心がなければ、到底古代人の考えは解釈出来ません。古代人の神は天地自然に  
います形なき不思議な力があるものと思われるものと、己れ以上の巨大な物体  
に対する巨大な形の二つは、目に見えぬ天の神の仕業と考えたのであります。  
天の神は天から天下るものとしての考えから、清浄無垢で穢れない場所なれ  
ば、たとえ高くない山なれど高山として崇めたのが「神奈備信仰」であります。  
ここから生まれた考えから山の民は自分たちの祖先は人として生まれてきても、  
魂の始めは今まで住んでいた場所から、年月とともに山に帰り少しずつ浄化し  
て、やがては天の神と同化して祖霊となり、一族を守護する山の神になると信  
じられていました。この思想は木曾御嶽の御嶽行者に残され、たとえ異郷の地

で死すとも魂は三ノ池に戻ると信じられ、特殊な盆供養が行われています。し  
かし生前悪しきことばかり行い、三無の心なく罪穢れにまみれた魂は、あまり  
にも重くして到底山上に登ることは出来ません。傷だらけになって沢や谷をさ  
すらい、拳句の果ては陽の当たらぬ暗い谷間に沈んでいたのであります。  
これが山の民がいう地獄谷、もしくは忌谷（イヤ。若しくはイミダニ）であり、  
その後における山岳行者が山における魂の浄化を願い、罪障消滅を願うようにな  
ったのであります。この思想は海の彼方の宗教に似通ったものがあつたの  
で、佛教が早く受け入れられたのではないのでしょうか。山の民はそれまでの祖  
霊山の神に対し、異国の神佛はすべて「あたしくにのみかみ」、「遠い異郷の地  
の神」として受け入れていきますから、ここより「蕃神」なる言葉が生まれたの  
でありましょう。もちろん異郷の地にての神は、そのまま日本古来の神に対し、  
「客神」として祭神の一柱に加えています。一例としてあげますと、平野祭  
神四座（平野神社・京都市北区）があります。第一殿の今木神は、桓武天皇の  
生母で帰化人系の高野新笠の遠祖 百濟の聖明王。第二殿の久度神は、百濟  
の祖仇度王。第三殿の古開神は、百濟の沸流王と肖古王。第四殿の比賣神は、  
新笠であります。その他に新羅の阿加留比売を比賣許曾神社（比賣許曾神社・  
大阪市東成区）、柏原市の大泊神社、八尾市の許麻神社、敦賀市杵見の信露  
貴彦神社、石川県鳳至郡穴水的美麻奈比賣神社などもあります。かつて  
古代朝鮮において白頭山を中心としての盛んであつた太白山信仰も渡来民とと  
もに伝わり、朝鮮の山神信仰に基づく巫女神を白山比◆1として石川県石川郡



船岡山に祀り、今日の山の民ゆかりの白山信仰となっています。

渡来民の中には、法華經に帰依するものが多く、朝な夕なに法華經を誦するが故に「持経者」とも呼ばれています。現世において苦しみ多き暮らしをなすは、すべて前世における己が所業として懺悔するだけでなく、知らず知らずに犯せし罪科なれば、人として生まれた以上これを消滅させるも務めとして選んだのが法華經であります。『普賢菩薩第二十八の卷』に普賢菩薩は如何に世の中が悪に染まり、人が純粹な人の心を失い、御佛の教えを軽んず者多く現れようとも、佛縁によりて法華經の存在に気づき、この教えを心から求めて受持し、朝夕に読誦し、經文を書写することによって、心の乱れがなくなる三昧の境地に至り、やがては一切の罪業が消滅し、諸佛諸菩薩に加護され、心の不安もなくなり、ますます精進するようになり、自分からあらゆる善を人にもすすめるようになるでしょうが、人は悲しい生き物でそうなると増上慢の自惚天狗となつて、せっかくの高邁な法華經の徳を失い身を滅ぼすなればと、持経者のために陀羅尼を説かれたのであります。この陀羅尼の功德によって、持経者が金銭や物質にとらわれることなく、異性によって心が惑わされる事なく、さらには人以外の邪悪なものにも、魔物などにも修行の邪魔をされる事がなくなり、さらなる功德に因りて次の世においては◆(心刀)利天に生まれ変わり、安樂な暮らしを得ることも出来れば、法華經の教えを深く守ることによって、この世においては心の安穩を得、死後においては兜率天上の彌勒菩薩のもとに行くことが叶うと云う、おおいなる功德があると説かれているのであります。

法華經の教えに従い、法華經の教えを弘めんとして、持経者が諸国を巡り歩いたのが、俗に云う「廻国修行者」の始まりですが、彼らは常に口にするのは「懺悔懺悔六根清淨」であります。これは俗に云う懺悔經と云われる『法華經三部經』なる一つ、『觀普賢菩薩行法經』に、普賢菩薩が「六根清淨懺悔の法」に説かれている、金剛力士が間違つた考えを打ち砕く金剛杵を持って、眼・耳・鼻・舌・皮膚・心の六根についている汚れを打ち砕くという例えを引用し、ともすれば移り変わりいくさまさまな仮の姿に、心が惑わされて眞実のものは目をおおいて見ることなく、眞実の声には耳を閉ざして聞くことなく、いたずらに快樂の虜となりて貪り、諸悪の根源舌禍にて功德の種を失い、心の欲するままに人の道を外しても欲望を求め、諸悪の根源なる心は汚泥にまみれては、未来永劫心が休まることなく、煩惱の虜囚となつて三界を流転するなれば、ここに御佛の前に悔い改めると云うのが、「六根清淨」の教えであります。かくして持経者が行く先々ですれ違ふことあれば、互いの六根清淨を願ひ、笠輪塔の杖を左手で持ち、右手で施無畏の印をすれば、これに対しては左手で与願印で持つて応酬するのが、習わしとなつたのであります。さらにこれが簡略化されたのが、山の行場において互いにすれ違ふ際に、下山者は必ず狭い柚道の場合譲りながら、「懺悔・懺悔・六根清淨、お登りさん御苦労さん」と先に声を掛ければ、「懺悔・懺悔・六根清淨、先達さん御苦労さん」と応酬されたのであります。

かくして法華經行者は、日本全国津々浦々の深山幽谷に行場を開いたのであ



りますが、彼らの六根清淨の思想は、兩部神道にもとづく同じ山岳修行者に受け入れられ、「六根清淨大祓」となり、「目に諸々の不淨を見て心に諸々の不淨を見ず、耳に諸々の不淨を聞きて心に諸々の不淨を聞かず、鼻に諸々の不淨を嗅いで心に諸々の不淨を嗅かず、口に諸々の不淨を言ひて心に諸々の不淨を言わず、身に諸々の不淨を触れて心に諸々の不淨を触れず、意に諸々の不淨を思ひて心に諸々の不淨を思わず」と唱えられています。法華經行者が開いた深山幽谷の行場が、時代とともに山岳修行者に引き継がれることになって、山の民が尊崇している山神を諸佛諸菩薩の垂迹として祀ったことが、權現の称号でよばれた所以でもあります。

奈良時代までは主として山の民が守る靈地において、持経者としての修行に励んでいたのが、佛教が正式に伝来するようになると、国においては各地に國分寺を建立し、積極的に四天王の加護による護国安穩を願う故に「金光明四天王護國之寺」としていますが、一方においては、当時天候不順で五穀の実りが悪く不作がちな所へ、至る所で疫病が蔓延し、人々の暮らしは疲弊の極みに達していましたので、これらの原因である人々の悪しき所業を悔い改めさせ、罪を滅して清淨な暮らしを送らせ、諸佛諸菩薩の加護を得んとしたのが、「法華滅罪之寺」國分尼寺であり、その後諸國に由緒有る寺院が多く誕生しています。これらの寺院の多くには、国が定めた僧侶だけの寺で、官の許可なしの僧侶を私度僧として区別していました。役行者は今日では修験道の開祖となっていますが、当時は私度僧でもない、普通一般の「聖」でした。十二世紀後半、

当時の今様・歌謡を修正した『梁塵秘抄（りょうじんひしょ）』の卷第二に、法文歌二二〇首、四句神歌二〇四首、二句神歌一二一首がありますが、その中に

聖の住所はどこどこぞ 箕面よ 勝尾よ 播磨なる書寫の山 出雲の鰐淵や  
日の御埼 南は熊野の那智とかや （梁塵秘抄僧歌二九七番）  
聖の住所はどこどこぞ 大峯葛城石の鉦 箕面よ勝尾よ 播磨なる書寫の山  
南は熊野の那智新宮 （同僧歌二九八番）  
大峯聖を舟に乗せ 粉河の聖を舳に立て、正きう聖に楫取らせてや 乗せて渡さん 常住佛性や極樂へ （同僧歌一八八番）

この場合の山岳修行者の聖は、今日の聖とは異なり、山の民が用いた言葉の聖であります。

『注』

『梁塵秘抄』は 岩波書店、同文庫版。

日本古典全集 『歌謡集上』 日本古典全集刊行会。

日本古典全集 『梁塵秘抄』 朝日新聞社

日本古典文学全集 『第二五卷 神楽歌他』 小学館。

日本古典全集 『卷十五 仏教文学集』 筑摩書房。

日本古典全集 『卷六 古典詩歌集』 河出書房。



他にも多数ありますが、手元におくには岩波文庫が手軽かと思えます。

山で暮らす民には、俗に言う山窩とは異なります。山窩は古くは一定の住まい無く、食べるに農耕を営む事なく、過去現在未来の三界に住む所もなく、日本古来の出雲系、アイヌ系の山の柚人の群れより離れ、人里を避けて奥深き山間僻地を漂泊する人々を言いますが、平安末期から、鎌倉時代にかけて、二つの生活方法を行うようになっていきます。即ち「セブリ」と呼ばれる一族は、木の洞、岩屋、雑木を用いての移動式の小屋掛を山裾、河原など水捌けの良い場所に、南面に向かい建てて暮らしています。

「イツキ」とよばれる一族の多くは出雲系の山の民と多くは同化し、その場所に定住し、生活のために様々な生活用品を作り出し、物々交換によって生活を送っていますが、当然山の民とは異なる生活様式と、習慣を継続しています。山には、古来山人なる一族も住んでいます。ここで言う山の民は出雲系の別れから、岩見・日向・高千穂へ流れた一族と、吉備・讃岐と流れ一族と、さらに大倭へ流れた一族がありますが、いずれも前山師、鉾山師、踏鞴師、鍛冶師、鋳物師、木地師、炭焼師などを中心とする部族集団ではあります。何れも部族の神は金屋子神を祀っているのが特徴であります。地方によっては金山神（かなやまがみ）として祀っていますから日本全国ではおびただしい数となります。さらにこれ以外の山の民は國造家の中において、大王家に叛旗を翻し

追われて山に入り、山の民となった人々も数多くあります。

法螺貝山人に尋ねると、アイヌは大体紀伊の国まで南下していますし、國造家縁のものは関東地方の一部にまで北上し、山窩、山人は東北より以北と、葛木王朝縁の地、出雲國造家の地には住んでいません。出雲一族、アイヌ一族とともに山を神聖視し、祖霊鎮まる所とし、どちらの山の民でも「火」は大切なものでありますから、年中絶やさぬ囲炉裏には「火の神の座」が設けられ、先祖代々絶やさぬのが家長の務めでもありました。現在でも山奥に行くと、何代にもわたる囲炉裏の火種があり、古い神社佛閣には不滅の火があり、さらに國造家には火継ぎの神事によって当主の命脈は絶える事がありません。この火の事についてよく知るものは、当然そこに住む一族の長でありますから、「ひをよくしるひと」の意味の、「ひしりのわけしりひと」から転化して、「ひじり」なる言葉が生まれたのであります。これが山の民の聖の謂れであります。中国における「聖」は、天地の現象をよく知り、すべての事実に対し熟知している人、簡単に申せば太陽（ひの意味）の運行に伴う、すべての現象を知る人であり、これが日本に入り智徳の優れた僧侶を表す言葉とされたのであります。

役行者は大和国葛木上郡茅原（ちはら）の生まれで、長じて賀茂の役の公（えだちのきみ）となりたりと山の民に伝えられています。役の公とは「賀茂氏の神奴の長（かみぬさのおき）」と言うのが直訳で、当時大王家に匹敵する葛木山麓一体の豪族賀茂一族の祖霊を、神奈備山に祀りし神事継承者で、その家は代々世襲制で、葛木の火を守護し奉る所から、「ひじりのきみ」と呼ばれ



た所以でもあります。神事継承者故に中臣家で、中臣意美麻呂について中臣神事継承を受け、神の道を極めるだけでなく、河内明日香の郷から山越えする、竹内街道を通り葛木の郷に入ったと伝えられている、明日香の郷に住む古代渡来人倭漢直、正式には応神天皇（二三九〜三一〇）の御世に渡来した後、漢の靈帝の曾孫（そうひん）阿知使主（あちのおみ）の後裔とされていますが、それよりも早く大和国高市郡檜前に住み、さらに山の民との接点となる場所近くの明日香の村に居住していますが、その後奥地へと入り、吉野川近くの大淀の比曾寺へと移っています。彼らの優れた知識と、新しい佛教について役行者は関心を示され、しばしば屋敷へ招き学ぶ内に、正式に倭漢直の氏寺檜隈寺で学んだのが縁で佛教を勉強さ

じごちの

れたと伝えられていますが、役行者の大叔父にあたる願行大徳は、百濟から来朝した呪禁師（じゅごむのはかせ）より呪法を学び、元興寺において觀勒（かろんく）や、慧灌（えかん）について三論宗、続いて密教を学ばれている当時としては知識僧ですから、当然この大徳について修行鍊成されています。佛教を深く学ぶためには膨大な経巻を紐解かねばなりません。そこで大徳について求聞持法を学ばれたのでありますが、孔雀秘法も伝授を受けられたと思われるので、頭でっかちの現代人では所詮当時の人々の心に入ることが出来ないのです。役行者が孔雀法をどこでいつ習得したかは分からないだけでなく、ひどい学者は孔雀法は役行者以後成立した法と決めつけていますが、この当時にはすでに

梁の伽婆羅訳の『孔雀王咒經一卷 鳩摩羅什訳』は成立しています。別名『妙臂印幢陀羅尼經（みょうび・いんとう）』、或いは『大金色孔雀王經』の異名があります。これらが既に伝わっていた形跡もあります。もともと孔雀は悪食の鳥とされていますから、ここ蛇蝎（へびさそり）をよく食らふ鳥とされ、佛教においては教宣活動に邪魔立てする輩（やから）を調伏する鳥とされ、佛敎守護神とされたのであります。役行者は家伝により日本武尊が伊吹山中にて蛇神が吐く猛毒の霧により落命されていることも、またまた蛇神による悪しき祟りなどの言い伝えを熟知していましたから、大徳から孔雀經を学び、孔雀經に心引かれた役行者が、この法にもとづく一印一真言による雜密獨特の秘法を学ばれたと思われます。役行者が行った呪縛法不動の金縛りも一印一真言であり、柱源神法の極秘伝に残され、さらに一印一真言による求聞持法は醍醐理性院から、西大寺へと移行し残されています。この一印一真言による修法は雜密の特徴であり、弘法大師も、傳敎大師も、この大和において伝授を受けていますが、これらは正式に修行し、その道を極めたもののみが知り得るものであり、所詮学者諸氏の預かり知らぬものであります。

役行者の生年についても『役行者顛末秘藏記』（日本大藏經修驗道疎卷三）によりますと、『役行者傳記』が舒明天皇六年（六三四）、『百因縁集』が白鳳四年（六六五）、『修驗秘記』が白鳳三年（六六四）となっていますが、没年については書かれていません。

入唐が大寶元年（七〇一）とあります。同じ『修驗道疎』卷三の『役君徵業



録』に大宝元年公年六十八とありますから、これを基にすると、『役行者伝記』の方が正しいようです。同書に役行者建てし祠の数二百八十六ヶ所とありますから、役行者時代にはすでに法華經行者によるに山岳修行道場が数多くあったと思われる。前述の『梁塵秘抄』にも、

四方の靈驗所は 伊豆の走井 信濃の戸隠 駿河の富士の山 伯耆の大山  
丹後の成相とか 土佐の室生と 讃岐の志度の道場とこそ聞け (梁塵秘抄靈驗所歌三一〇番)

筑紫の靈驗所は 大山四王寺清水寺 武蔵清滝 豊前國の企救の御堂な 竈門の本山彦の山 (梁塵秘抄同所三一一番)

とありますが、さらに数多くの靈場が書かれています。当時すでにこれらの靈場があり、数多くの山岳修行者が多くは法華經にもとづいて、修行している事を知った役行者が、渡来民族、山の民のそれぞれの山々の修行道場を尋ねようとしたのが、役行者が山における修行のきっかけではないでしょうか。

『役行者本記』(日本大藏經修驗道疎卷三)によれば、

役行者御年三十七歳の天智帝九年(六七〇)庚午七月大峰を發し出羽の國は羽黒山。

月山。湯殿山。金峰山。鳥海山。奥州秀峰(蔵王大權現)。

天智天皇十年辛未五月上野赤城山に到り。上野の赤城山。下野二荒山(日光山)。越後伊夜彦山(彌彦山)。越中立山。加賀白山。若狭越智山。近江日

枝山(比叡山)。山城愛宕山。

役行者御年四十歳の天武天皇帝白鳳二年(六七三)癸酉六月伊勢兩宮。二見浦。尾張 熱田。三州猿取。同峰堂。白峰。駿州富士。相州足柄(矢倉嶽)。同雨降。同箱根。伊豆 天木。走湯。相州江ノ島。筑波(常陸)。鹿島香取浮巢三岫。信州浅間嶽。甲斐駒ヶ嶽。御嶽(信州甲州兩國)。南宮。鳳凰山。近江膽吹(伊吹山)。同石山。大和笠置。

役行者御年四十五歳の同七年(六七八)戊寅八月讃州八栗嶽(五剣山)。筑前背振山。豊前彦山。筑後高羅(高良山)。日向霧島。土佐足摺。伊予石鎚。薩州鹿兒山。日向檉原山。高千穂の嶽。同速日嶽。同小戸の瀬戸。豊前木綿山(湯布岳)。宇佐山、日向阿蘇山。同朝蔵山(朝倉山)。同御笠山(寶満山)。宗像山。長州面影山(面影山)。周防盤國山(岩國山)。安芸嚴島。備後武部山。備中湯川。同黒髮山。同彌高山。美作樞。垂山(塩垂山)。播州青山。同赤山。岩見八上山。丹後大江山。同北峰。

役行者御年四十九歳の同十一年(六八二)壬午四月大峰。熊野三山。紀州三栖山。同百重山。同真形山。飽美山。摂州箕尾。同毘陽山。同摩耶山。和泉荒山。河内生駒山。

役行者御年五十歳の同十二年(六八三)癸未四月三熊野山。大日嶽。釋迦嶽。空鉢嶽。

七面山。彌山。

役行者御年五十五歳の持統帝金明二年(六八八)戊子夏愛宕山。大島。富



このように役行者は諸国の法華經道場を数多く巡っていますが、『葛木秘卷』によりますと、この後役行者と同じ修行者を志すものが、役行者の御跡を慕い廻国六十六ヶ所巡りが説かれていますので、これを紐解くと、かつての古い行場と、役行者の足跡がわかりますが、紙数の都合で省略致します。本来の廻国修行者は、多くは袖道が多く、野宿をしながら、このように難行苦行をしてまで慕う役行者に対し、今日では謎が多いとされています。資料としては、一応醍醐寺の聖寶尊師が（八三二〜九〇九）が書き残されたものが、その骨子となつてはいます。『役行者形生記』なるは、天和四年（一六八四）秀高筆、『役公徵業録』なるは、宝暦年間（一七五一〜一七六四）佑誠玄明筆、『役行者御伝記圖會』なるは、嘉永三年（一八五〇）藤東海筆、『役行者顛末秘藏記』なるは元禄六年（一六九三）拾叟筆、『役行者本記』は問題あつて、原本によると神亀元年（七二四）木の皮に書役義玄が書き、文政九年（一八二六）迄細かく筆者された年号が書かれています。室町末期（一五七〇頃）に書かれたものが定説となり、天保十年（一八三九）に道猷筆にいたつています。といふことは『日本記略』の熊野行幸の所見とされている宇田法皇の頃に、修験道と言うものが系統だつて成立化され、今日の役行者像が作り上げられたのではないでしようか。その一例としてあげますと、葛木と言えば一言主伝説が有名ですが、これとて『日本書紀』から飛躍して作り上げられたものであり、事

実とは大きく異なります。

役行者縁の茅原吉祥草寺近くで村人が田植えの大切な時を迎えましたが、天候が大荒れに荒れたために田植えが遅れ難儀しているのを知つた役行者は、遠慮する村人の中に入って進んで早朝から田植えをされたのであります。お陰で夕刻には無事に終わりましたが、村人に感謝される中をお帰りになられたのです。心優しいいつもながらの役行者に村人は感謝して、昼餉の時に笠を脱いで召し上がられたその場所に、地藏尊を安置して祀つたのが岩屋峠下の笠堂であります。このように村人の事を常に心配し、いろいろと手助けした伝説は数多くあります。さらに吉野川は当時は暴れ川でよく氾濫し、人々を難儀させていましたから、これを改修したり、いろいろと役行者は行われていますが、いつの時代でも心のねじくれたものが必ずあります。それが一言主神社の社人です。一言主神は託宣の神であり、当時の託宣を預かるものは当然日靈女であります。もともと一言主神の出自は出雲國造家であり、役行者も同じ國造家の血筋をひく賀茂一族の火を守るものなれば、互いに争うことは絶対ありえないのです。『古事記』『日本書紀』に書かれている一言主神話は、当時この一帯が絶対的な葛木政権の地でありましたが、出雲の國譲りと同じように大王家に帰属したことを正当化して物語つたまで、あります。当時は政治よりも、神に対する祭祀権の方が優位されていた時代ですから、葛木家の祭祀権も帰属すれば当然大王家に渡さねばなりません。それに不服であつたのが一言主社主であつたようです。事あれば大王家に逆らつたために、土佐の配流事件となつ



ていきますが、役行者の時代になっても尾を引いたのと、社主は当然人々の上にありて軽々しく動かぬものなれば、役行者のように常に身軽く山の人、里の人の区別なく尽くされることと、新しい佛教に帰属する事には承知しかねるものがあつたのでしよう。そこへたまさか吉野川氾濫で難儀する人々をみかねて改修工事にとりかかられたのでありますが、多くの費用と人々の協力が必要であつたので、同じ葛木の流れのよしみで協力を願ひ出た所、にべもなく断るだけでなく、さまざま妨害に出た次第であります。さらに役行者に対し呪詛に及んだので、やむなく葛木の山に伝わる作法どおりに葛をもつて神籬を作り、役行者に呪詛をなした神々に対して真実を申し述べたのが『葛木秘卷』にある久米の岩椅の真相であります。これらのことは出雲一族の火継の神事、大王家に伝わる日靈女の神事を知らぬ故に、今日の誤つた歴史的解釈となつたのでありましょう。正式には『葛木秘帳之卷』とでも言うべきものかも知れませんが、何故か一卷の巻物にはされず、葛木に関する秘事の類いはすべて封印され、口授形式により一子相伝の形で今日まで伝承されていますが、兩部神道の中興の祖とも言われる慈雲尊者も、西大寺秘法に基ずき、葛木山中の巖頭において瞑想三昧にふけられて感得なされたと伝えられています。『葛木神道』、別名『樛宮神道』であり、これに元づき神代に関する手引き書を認めたのが『葛木神道折紙』であり、さらに加筆訂正し大成させたのが『雲傳流神道折紙』であります。確かに『葛木秘卷』には今日の修験道とは異なり、由緒ある國造家の歴史、秘事、大王家との係わりあい。抹殺された國造家縁の秘事、さらに

は血ぬられた賀茂、葛木の一族についても語られ、大王家によって一部の賀茂、葛木の神々は大王家の客神として祀られるも、大半の葛木の神々は怨念を抱いたまま葛木の所々に座したる事実を、つぶさに調べあげ、葛木一族の御霊の昇華を願うと共に、葛木の奥深き地獄谷に蠢く下級神とも言える、貧しき彼らの怨霊も共に安らかに眠り玉えと、役行者は当時の法華持経者の教えに従い、怨念深き神々を葛木の高き山々、峰々、谷間に神靈化して加えて祀り、さらに御魂鎮めとして法華經経卷を埋納したのが法華經塚の由来でありますから、役行者自身が正統葛木王朝の血筋者であり、大王家の秘事をすべて知り尽くされていた事で生涯、厳しい監視をされるだけでなく、葛木の地を追われることになられたのでありましょう。

役行者が精根こめて、葛木の秘事に『法華經』を用いられたことは、佛の教えがこの世より絶えることがあれば、まさに末法濁世のさまと化すでしょうが、そのような状態になっても深く泥の中に潜む蓮の根が枯れることがないように、佛の教えも時が来るまでは静かに眠り続けるでしょうが、その反面末法濁世なればこそ真実の救いを求めるものも現れ、再び佛の教えが蓮の花と同じように開くことになるでしょう。されど真実の声に耳を傾けるもの少なく、人の心も無くしたものにとっては、むしろ佛の教えは耳障りであり、うとましいものなれば、再び佛の教えの花を咲かそうとすれば、邪魔立てをするものも現れるかもしれません。そのおりは多くの人々の塗炭の苦しみの難儀を救うために、一大勇猛心をもって御教えを学ぶべきであり、その時は佛の教えを述べし十萬



八千余卷の中でも一際優れたる、真実の教えとされ、法の華に例えられ『法華經』となづけたる、この経巻を紐解き、人の人たる道を学び、五障の障り故に成佛叶わぬとされる女性も救われるという御教えを守り、さらにこの経巻を浄書するとともに、世に弘めることにより、再びこの世は明るく人々は救われるであろうとお考えになられ、今は悲運をかこち衰えし葛木一族の為に、この浄行に手を染められたのではないでしょうか。

静かに観念窟において役行者は瞑想にふけられ、葛木一族の来し方を思いめぐらせられたかも知れません。かつて横向きの郷に於いて、日本古来の土着の民、山の民、國造家の下々のものまで心配りなされる情け深い大君として、誰しもが一切の精霊を納め奉る神とされて崇めていたのが、三輪の山の主とならせ玉ふ大物主命ですが、その三輪の郷において政り事を行なっていましたのが、大物主命に仕えていた物部一族の長邇藝速日命であり、

登美能那珂須泥毘古の妹登美夜毘賣と婚姻し、宇摩志麻遲命の御子をもうけられていました。命が病の床に臥せられ死期の近いのを悟り、阿遲鍬高日子根命を招き寄せ、御山の裾なる初瀬の郷を与え、この後は迦毛の君としてこの地を納め、さらには國造家と、大王家が互いに争うことなきよう努め、大王家の新しい当主となるであろう神倭伊波禮毘古命と手を携えて、大倭なるこの国の命脈を保つようと遺言し、日向の国に迎わしめたのでありますが、この事を知つたそれまでの忠実な命の家臣は、倭の国鳥見の郷の主・登美能那珂須泥毘古がこれに猛反対し、日向より来る一行をことごとく殲滅せんと、てぐすねひいて

待ち受けたるゆえに、大倭の地を目指した大王家の東征軍が、倭盆地に入る当時の最短地倭川に近づき、川内の潟湖白肩の津（現枚方の地）である日下沖より上陸し、河内から磯城盆地に入り、賀茂建角身尊を始め、待ち受けたる一族と合流せんとしたために大惨事となり、大船団も僅か一隻を残すのみ、これに敗残兵がたどり着くに盾を覆い辛うじてのありさまなれば、これよりこの地を盾津と云いしとか。孔舎衛坂の戦いで深手を負われたのがもとで、紀伊の国男之水門にて落命された兄五瀬命を、國造家の分かれ天道根命が、天岩戸神事に造られし日像（ひかげ）の鏡、日鉾の鏡を祀りし由緒ある日前（ひのくま）神宮の近くにある竈山に埋葬したので、この後竈山神社となりしとか。その後邇藝速日命が亡くなられた故に、長子宇摩志麻遲命を擁立した登美能那珂須泥毘古は、己が天下にせんとさまざまな策略を用い、武勇の誉れ高い賀茂建角身尊も暗殺し、同じ大倭の古代豪族であった賀茂一族の殲滅を幾度か試みています。が、神倭伊波禮毘古命が正式に大和大王家の当主となるに及んで自滅させられたのでありますが、いずれにせよ長い闘争に明け暮れ、賀茂一族は昔の勢力を失ったのであります。

想うに役行者は紀ノ川の流れに近い南海道の起点、賀陀の駅家（現加太町）の沖合に神島、地の島、沖の島、地続きの虎島よりなる友が島において、かつての古戦場や、和泉の山々がみわたせるこの地を選び、こしかたの一族の悲劇を偲びながら、一族の菩提を弔うために、法華經道場と伝えられている葛木の山々に、法華經二十八巻を何処の地に埋納すべきかをご思案なされた上で、御



堂に籠もられては一卷、亦一卷と浄書されて金剛山脈に埋納されたのでありましょう。されど長い年月の間に風化されて伝説化したことと、役行者を崇める先達の言い伝えの不確かさによるものがありますが、さらにその埋没された経塚の場所が二転三転して伝わり、それをそのまま書き物として残されたことが、ますます本当の経塚の位置を不明なものとしたのではないのでしょうか。

古来より葛木二十八宿の経塚についての埋納位置については、確かに諸師の方々によって調べられています。一応文献として古いのは鎌倉時代初期と云われる延喜十六年(九一六)の『諸山雜記』、ついで室町初期の応永年間(一三九四〜一四二七)の『葛城峯中記』、永正元年(一五〇四)の『葛城修行灌頂式』、天正十七年(一五八九)の『葛城峯宿次第』、宝永六年の『葛城先達峯中勤式廻行記』、さらに江戸時代の嘉永三年(一八五〇)の『葛嶺雜記』などありますが、法華經經卷の埋納場所がそれぞれ異なっています。後世誰しもが本当の霊地を求めて幾多の努力をなされていることは事実ですが、未だ解明されていないのも事実であります。今日でも研究なされている学者は随分とおられ、さまざまな研究機関紙に発表されていますが、そのいずれもが、役行者を徒に修験者の祖として崇め、あくまでも修験道方式に当てはめ、発表者の主観のもとに、此の場所が間違いないとされるために、ますます不正確な経塚の位置になりしものと想われます。

参考までに得度師僧天台寺門中村健壽師が葛城二十八宿調査されたおりのメモを写してみますと、

諸山縁起 葛城峯中記 葛城修行灌頂式 葛嶺雜記  
鎌倉初期 室町初期 室町末期 江戸時代

第一 序品 阿布利寺 友ヶ島 島岩屋 友ヶ島

阿布利寺・序品岩屋

第二 方便品 一の宿 國見橋多輪 伽陀 二の宿 神福寺  
今の八幡

朱書《神福寺跡善女ヶ池脇の石祠内石碑尋ねるべし》

第三 譬喩品 大福山 大福山 釋迦嶽 大福山本恵寺

朱書《墓の谷奥の雲仙峯山頂石祠と石碑尋ねるべし》

第四 信解品 入江の宿 入江宿 高山 入江宿除蔵王

朱書《崖の上の阿彌陀如來の種子の自然石を尋ねるべし》

第五 藥草喩品 光明寺 石叟瀧山 大福山 多聞寺

朱書《山上稚児の墓不動の種子入り自然石尋ねるべし》

第六 授記品 西の持経者 西持経者 雨師嶽 神道畑

朱書《松峠の松下は疑わし。志野峠にも言い伝えあり》

第七 化城喩品 関柱の宿 伽井 龍宿 中津川高祖堂

中津川秘所



朱書《松の下自然石釋迦の種子入り自然石尋ねるべし》

第八 弟子受記品 鈴杵ヶ嶽 伊勢宿龍宿 一乗山 犬鳴山寶瀧寺

朱書《灯明岳山頂の釋迦の種子入り石碑尋ねるべし》

第九 無学人記品 龍の宿 上八幡 七越 金剛童子祠

龍の多輪

朱書《葛城山頂嶺の龍王石祠、不動・金剛童子種子入り尋ねるべし》

第十 法師品 石蔵王山 石蔵王山 岩 湧 牛瀧山大威徳寺

朱書《山門脇地藏種子入り自然石尋ねるべし》

第十一 見寶塔品 萱の多輪の留 瑠璃多輪 柳 宿 龍宿山七越峠

朱書《経塚山上の円墳調べるべし》

第十二 提婆品 朴の宿 朴の留 神福山 天女山正樂寺

朱書《朴笛の松林石積を尋ねるべし》

第十三 勸持品 堀越の山 堀越宿 金剛山 鎌の多輪

燈明峯寺

朱書《多輪の頂泉石に大日如來あるを尋ねるべし》

第十四 安樂行品 佛徳の多輪 佛徳の多輪 石 寺 福玉山光瀧寺

朱書《杉木下の祠内の善女龍王・不動明王調べるべし》

第十五 従地湧出品 柿の多輪 秘所有。本堂 大日嶽 岩湧寺

朱書《寺裏の嶺上五輪塔調べるべし》

第十六 如来壽量品 今泉の水の宿 今泉水宿 牛頭 流谷金剛童子

朱書《川にあった不動形の石を調べるべし》

第十七 分別功德品 地峯の留 南不動 朝原 天見不動

朱書《ボタニ池の祠内の不動石佛尋ねるべし》

第十八 随喜功德品 黒◆1 黒◆1 水分 岩瀬の経塚山

の多輪 多輪

朱書《山頂松の下の地藏の種子入り石碑尋ねるべし》

第十九 法師功德品 神福山 神福山 堺那 神福山大澤寺

前鷲の石屋

朱書《山頂祠前の土盛りを調べるべし》

第二十 常不輕品 石 寺 石寺呂師宿 金立 石 寺

朱書《行者杉近くの自然石の大なるを尋ねるべし》

第二十一 如来神力品 湧水嶽 秋尾寺湧水嶽 神 下 金剛山轉法輪寺

朱書《文殊岳の経塚を調べるべし》

第二十二 囑累品 水越の宿 水越宿 石 坐 水越経塚

朱書《水越峠した大田和地藏尋ねるべし》

第二十三 菩薩本事品 堺那寺 堺那寺 切立塔 俱尸羅経塚

北千房あり 屋敷斗也

朱書《六地藏側法華経塚近くを尋ねるべし》

第二十四 妙音品 小鷲の宿 小鷲宿 小 嶽 平石峠経塚

朱書《峠側の役行者石像を尋ねるべし》



第廿五

普門品

高貴の留

見初塚  
護法笈石

大嶽

神下山高貴寺

朱書《寺裏の畑中の石塚を尋ねるべし》

第廿六

陀羅尼品

二上の石屋

二上權現

仏生谷

二上權現

朱書《雄岳頂上の土盛上の自然石を調べるべし》

第廿七

巖王品

大阪の隣下

八部山長谷寺

田尻

逢坂の経塚

朱書《今は民家なる庭の五重石塔尋ねるべし》

第廿八

勸発品

普賢寺

亀尾宿

亀瀬

亀の尾宿

朱書《川中の亀の形をした石を尋ねるべし》